

ENEOS Technical Reviewを 振り返って

新日本石油株式会社 研究開発本部
執行役員 研究開発企画部長

よしだ まさひろ
吉田 正寛



平素は、ENEOS 製品をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。弊社は、新日鉱ホールディングス(株)と経営統合することになり、本年4月1日に統合持株会社としてJX ホールディングス(株)が誕生。来たる7月1日には、中核事業会社としてJX 日鉱日石エネルギー(株)、JX 日鉱日石開発(株)、JX 日鉱日石金属(株)が設立され、エネルギー・資源・素材グループとして事業を展開していきます。

本誌は石油精製技術、製品設計・製造技術に関する弊社の取組を長年ご紹介してきたもので、本52巻2号が、統合直前の新日本石油として最後の「ENEOS Technical Review」となります。今回は、読者の皆様とこれまでの歴史を少し振り返りながら、お話しを進めていきたいと存じます。

(歴史について)

昭和34年2月、「日石レビュー」1号として産声をあげました。これより30年以上の間、年6回のペースで発行され、途中、平成3年には年4回、昨年平成21年から年3回の発行となりますが、何と、52年の長きに亘りご愛読いただいている、超ロングベストセラー作品と言っても過言ではありません。

当時、弊社取締役販売部長 橋谷信一は、その巻頭言(扉のことば)で発刊の主旨を以下に記しています。

「石油製品の使用技術の研究・向上は、消費者と製造業者との協力ではじめて実現できるものでありますから…略…そのひとつの方法として定期刊行物の発刊を実現…」

この時期は、石油各社が、新型の石油精製設備、石油化学設備を次々に新設し、新しい用途に向けた石油製品が数多く生み出された時代で、各企業が研究開発および技術力を競い合う時代に突入していくことになります。しかしながら、どんなに優秀な石油製品が世に出ても、それを使用する技術に関する知識が不十分では、所期の目的を達することができません。

そこで、これを解決するためのひとつの方法として、需要家の皆様に、新しい石油製品の使用技術や最新の石油関連技術の動向や情報提供と言った技術交流の場として本誌を発刊することになった訳です。つまり、日石レビューを通して、弊社石油製品や関連する技術をお客様にご理解いただき、多くの貴重な声を吸収することで、より一層満足度の高い商品開発につなげていくことが発刊の最大の目的でありました。

(実は、第2次対戦後の占領政策が解かれ、操業再開が許可された何と昭和24年から、“戦後の渴望する新技術の給源”とする主旨の下「日石技報」が発行されており、日石レビューの前身があります。)

横道にそれますが、名称も時代により変わりました。昭和34年第1号「日石レビュー」は、昭和50年に創刊100号、昭和63年日本石油100周年、平成4年の創刊200号を迎えるものの、平成11年「日石三菱レビュー」まで40年余り続きました。「日石三菱レビュー」は3年、その後の「新日本石油レビュー」は1年、平成15年から今の「ENEOS Technical Review」は8年目です。

(時代と共に変わる内容)

本誌内容も、その時代時代のエネルギー事情を、敏感に反応した内容となっています。

- 昭和30年代末は、まさにエネルギー源が、石炭から石油に切り換える時代。
→石油系燃料油の燃焼装置あるいは燃焼方法、新しい潤滑油の品質・性能・使用技術等の新しい知見を紹介。
- 昭和40年代は、高度経済成長に伴い燃料の使用量が大幅に増加した時代。
→大気汚染防止法施行(昭和43年)。公害問題に関する法規制の動向および燃料使用に及ぼす影響に関する情報などの提供。
- 昭和50年代は、40年後半の第一次石油危機の影響を受けて省エネルギーが求められた時代。
→省エネルギーに関する情報発信が多く見られる。またガソリンの無鉛化もこの時期。
- 昭和60年代は、酸性雨、地球温暖化、オゾン層破壊、海洋汚濁等の環境問題がクローズアップされた時代。
- それ以降、平成となり、地球温暖化問題は今やグローバルで最も重要かつ解決すべき課題の一つとなっています。
→低炭素社会の実現、CO₂削減に貢献する革新的環境・新エネルギー技術開発情報の提供。

(配布先と反響)

配布先は、部数にして1回につきおよそ2500部。重機、電力・電機、鉄鋼・自動車・金属加工、海運・水産・船舶、化学、土木建築関係等のお客様(需要家)に加え、官公庁、大学研究機関、国会図書館など多種・多岐に亘っています。

また、本誌の利用方法ですが、総説、報文等は実務上の参考資料として、また、勉強会資料等に活用されていることなどを耳にいたしますと、手前みそではありませんが素直に喜ぶとともに、一層の内容の充実と責任の重さを痛感する次第です。余談ではありますが、実は、本誌への投稿は、弊社の若手技術社員の登竜門でもあり、人材育成の場にもなっています。

最後になりますが、地球温暖化対策への取組は喫緊の課題であり、持続可能な低炭素社会を実現するため、弊社は、石油の高度利用は勿論のこと、燃料電池、太陽電池、水素等の新エネルギーに関する技術開発に積極的に取り組んでまいります。その成果を本誌を通じてご提供するとともに、皆様のご意見を頂戴し、低炭素社会実現に繋げていきたいと存じます。

また、JXホールディングス(株)が誕生した4月1日、JXグループ理念および、その実現のために、JXグループ行動指針(EARTH* - 5つの価値観)が示されました。本誌の名称は検討中ではありますが、次号は新会社の創刊号として、この新しい理念を受け継ぎ、新たな“X”(みらい)に向かって再スタートいたします。引き続き本誌をご愛読頂くとともに、また、弊社グループ製品をご愛顧頂きますようお願い申し上げます。

(註) *JXグループ行動指針 5つの価値観(EARTH)に基づいて行動する。

Ethics 高い倫理観、Advanced 新しい発想、Relationship 社会との共生、Trustworthy 信頼の商品・サービス、Harmony 地球環境との調和